フランシス・ゴドウィンの『月の男』における民族誌的語りの位置付け

穴本玲奈

はじめに

英国人聖職者、作家のフランシス・ゴドウィン（1562–1633）による『月の男―駿足の使者ドミンゴ・ゴンザレスによる月世界旅行譚―』（1638）は、スペイン人の主人公ドミンゴ・ゴンザレスが一人称で語る回想形式の空想物語であり、月世界への旅の過程が描かれている。[1] 物語は四つの場面に分かれ、それぞれにおいて異なる冒険と発見が展開される。前半では、ゴンザレスが西ヨーロッパを遍歴し、東インド諸島行きの航路に就くまでの経緯が描かれ、やがて白い雁に似た渡り鳥を用いた飛行装置を開発し、宇宙空間へと飛翔する様子が描かれる。月世界では、その自然環境、住民、社会制度を学ぶ様子が語られ、地球への帰還後は中国での滞在が描写されつつ、物語は終結する。

『月の男』は、ユートピア文学・ピカレスク文学・天文学・旅行記などの要素が交錯する作品として多角的に論じられてきたが、近年は植民地主義的・民族誌的言説との関係に注目が集まっている。[2] その背景には、大航海時代の影響を受けた 17 世紀イングランドの知的状況がある。当時盛んに刊行されていた旅行記や地誌の記述は、『月の男』の地上および月世界の描写においてもしばしば参照され、その語りにも反映されている。[3] 加えて、望遠鏡の発展により月面観測が進み、古代ギリシャに端を発する月の居住可能性が議論されるようになった。本作の序文では、コロンブスの新大陸発見になぞらえて月世界探査がもたらしうる利益について言及されており、地上と月の往還が植民地主義的な語りの枠組みで構成されていることが示唆される。[4] 特に、既存の地誌的・民族誌的記述が月世界の描写にいかに援用されているかの分析は、重要な課題である。

実証的な飛行装置の開発およびセント・ヘレナ島の描写

『月の男』に登場するゴンザレスの飛行装置は、渡り鳥に特殊な器具を括り付けるという、一見荒唐無稽な発想のように思えるが、彼自身の観察と試行錯誤によって科学的に設計されたものとして語られている点が注目される。これは、先行する月旅行物語における超自然的手段とは明確に一線を画す。たとえば、古代ギリシャのルキアノス『本当の話』では、主人公たちは偶然の旋風によって船ごと月に運ばれるが、この展開自体が虚構性を風刺する前提に立っている。[5] また『イカロメニッポス』では、主人公が鳥の翼を手にくくりつけて空を飛ぶが、これもイカロスの神話的逸話を風刺的に再構成したものである。[6] さらに、アリオストの『狂えるオルランド』では、アストルフォがペガサスやヨハネの奇跡の力によって月に至るなど、月への旅は一貫して神や超自然の介在によって可能となっていた。[7] これに対し、『月の男』では人間の知恵と段階的な実験によって飛行装置が開発されており、[8] 神話的・奇跡的手段から科学的・合理的手段への移行を示す転換点と位置づけられる。この点において、本作は月旅行文学史において画期的な意義を持っていると言える。

このように、ゴンザレスが実地の経験や観察を重視する姿勢は、彼の飛行装置の開発過程に明確に表れているが、その探究的な態度は、地上世界の描写における語りのスタイルにも投影されている。それは、『月の男』におけるセント・ヘレナ島の描写には、実際の体験や観察に基づく地誌的記述の影響が明確に見られるからである。オランダの貿易商・作家であるヤン・ホイフェン・ヴァン・リンスホーテンの『東方案内記』の英訳版（1598）や、リチャード・ハクルートの『イギリス国民の主要な航海と旅行と発見』（1589）は、当時イングランドで広く流通していた地誌・航海書であり、ゴドウィンがこれらの文献を参照した可能性は高い。これらの文献においてセント・ヘレナ島は「地上の楽園」や「大きな救いの地」とされ、空気や水の清浄さ、ポルトガル人によって持ち込まれた動植物の豊かさが詳細に記されている。[9]『月の男』でも、セント・ヘレナ島の豊かな植物や果物、家畜、野生動物について細かく描写されており、島を「祝福された島」や「唯一の楽園」と表現するなど、これらの地誌的記述と細部にわたって一致している。[10] さらに、ゴドウィンの文章は客観的かつ平易な文体で自然の豊かさを淡々と伝えており、これはゴンザレスが目撃証言を重視する語り口とも合致する。このため、同箇所には空想的な要素がほとんどなく、読者に対して島の自然をありのままに伝えようとする姿勢がうかがえる。この現実的な描写は、以降に展開される月世界の空想的物語の蓋然性を高める役割を果たしていると考えられる。

中国の都市や言語に関する記述

『月の男』における中国の描写は、当時流通していた地方地誌や宣教師による記録に基づく情報を多く取り込んでいる。語り手ゴンザレスは、人口の多さや国土の広大さに加え、都市名称の異表記や自然環境、言語の特徴に至るまで詳細に言及する。例えば、現在の北京を指す都市名は「パチン」や「パクゥイン」と表記されており、

これは『パーチャスの巡礼』に見られる表記の多様性を反映したものである。[11] また、中国語が音律に基づく単音節語であり、地方ごとに異なる言語が存在し、庶民と官吏で使用言語が異なる点も記されている。これらの記述は、マテオ・リッチの『中国キリスト教布教史』およびそれを典拠とする『パーチャスの巡礼』の内容と一致し、当時の中国に関する知識を的確に反映している。[12] これらの情報は、語り手ゴンザレスの個人的な経験として語られており、観察や実地の見聞に基づく記述として提示される。この語りの手法は、17世紀ヨーロッパの宣教師や探検家が中国文化を記述する際に採用した民族誌的報告の語りと類似している、とりわけ、事実に即した細部の描写や、一人称の視点による経験の強調という点で、マテオ・リッチやニコラ・トリゴーの報告書に見られる記述態度と共通している。そのため、本作における語りの形式は、地誌の内容とともに、その記述の枠組みにおいても当時の宣教・探検文書の語りの手法を踏襲していると考えられる。こうした史実に基づく描写は、セント・ヘレナ島と同様、空想的な月旅行に現実味を与え、物語全体の説得力を高めている。既知の世界の民族誌的描写を通じて未知の世界の現実性を構築するという対比的構造は、本作の序文における「かつては未知であったものが既知となる」という言葉とも呼応し、読者の想像力を効果的に刺激する仕掛けとなっている。

月の民族誌

『月の男』では、セント・ヘレナ島や中国に関する地理的・民族誌的知見と、それらを記述する際に用いられていた語りの文体が、月世界という架空の空間の描写にも応用されている。月の地理描写は、当時の地上世界の旅行記やコペルニクス、ギルバートらの天文学理論に基づき、綿密に構築されている。ゴンザレスは、月面の明るい部分を海、暗い部分を陸地と位置づけ、生物の存在可能性を示唆する点で、当時の科学的知見を取り入れている。[13] また、月の言語は音律に基づく単一の共通語として設定されている。中国語は地域ごとに異なる方言を持つため、月語のような全国共通語とは異なるものの、この特徴は中国語の音調言語的性質と類似している。というのも、月語の共通語としての性質は、複数の文化圏にまたがり共通の文字を通じて意思疎通を可能にする中国語の言語体系から着想を得た可能性が高いからである。[14] こうした地上世界の知識を下敷きにした月文明の描写は、月を到達可能な場所として描くとともに、植民地主義の文脈を想起させる。さらに、王立協会創立者のジョン・ウィルキンズは、『月の男』を巧妙な空想と評価しつつも、そこから得られる知識が国家の利益に資すると認め、当時の知的探究と植民地開拓の理念との結びつきを示している。[15]このように、『月の男』は地誌・民族誌的知識を基盤に据えつつ、科学的想像力を駆使して異世界を構築することで、物語全体を通じて 17 世紀初頭の世界観や知的潮流を反映している。そして、本作を地誌・民族誌的観点から読むことで、『月の男』は現実世界と接続する空想旅行記として再評価することができるのだ。

---

[1] Francis Godwin, *The Man in the Moone:, or, A Discovrse of a Voyage Thither by Domingo Gonsales the Speedy Messenger*, (London, 1638), STC (2nd ed.) 11943.5.

[2] William Poole, 'Introduction' in Francis Godwin, *The Man in the Moone*, ed. by William Poole (Broadview Press, 2009), pp. 11–60 (pp. 54–56).

[3] 16・17 世紀オックスフォード・ケンブリッジ両大学における地理学関連書の所有率に関する議論は、Lesley B. Cormack, *Charting an Empire: Geography at the English Universities, 1580-1620* (University of Chicago Press, 1997) を参照。

[4] Godwin, sigs A4^{r}–B^{v}.

[5] Lucian of Samosata, *Certaine Select Dialogues of Lucian Together with His True Historie, translated from the Greeke into English by Mr Francis Hickes* (Oxford, 1634) STC (2nd ed.) / 16893, p. 111.

[6] Lucian of Samosata, 'Icaromenippus; or, A Man above the Clouds' in *Lucian: Three Menippean Fantasies*, ed. and trans. by Joel C. Relihan (Hackett Publishing Company Inc., 2021), p. 40.

[7] Ludovico Ariosto, *Orlando Furioso*, ed. by L. Caretti (R. Ricciardi, 1978), p. 902.

[8] Godwin, pp. 25–26.

[9] Jan Huygen van Linschoten, *His Discours of Voyages into ye Easte & West Indies Deuided into Foure Bookes* (London, 1598), STC (2nd ed.) / 15691, P. 173; Richard Hakluyt, *The Principall Nauigations, Voiages and Discoueries of the English Nation* (London, 1589), STC (2nd ed.) / 12625, p. 222.

[10] Godwin, p. 14, 16–17.

[11] Godwin, p. 119; Samuel Purchas, *Purchas His Pilgrimes in Fiue Bookes*, III (London, 1625), STC (2nd ed.) / 20509, p. 402.

[12] Purchas, pp. 342-43, 335.

[13] Godwin, pp. 63-64.

[14] Purchas, p. 382.

[15] John Wilkins, 'The First Book. The Discovery of a New World or a Discourse Tending to Prove, That 'Tis Probable There May Be Another Habitable World in the Moone. With a Discourse Concerning the Possibility of a Passage Thither', in *A Discourse Concerning a New World & Another Planet in 2 Bookes* (London, 1640), STC (2nd ed.) 2564, pp. 240, 242.